ホワイトアウト

Shimpo Yûichi

真保裕一

ホワイトアウト

真保裕一

新潮社

●新潮ミステリー倶楽部特別書
んぽゆういち）●発行者・佐藤亮一
東京都新宿区矢来町71／振替〇〇一
266）5411・読者係03（326
●製本所・加藤製本株式会社●価格はカ
本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下
たします。
●発行・1995年9月20日
© Yûichi Shimpo 1995, Printed in Japan

下ろし●ホワイトアウト●著者・真保裕一（し
●発行所・株式会社新潮社・郵便番号162
四〇—五—八〇八／電話・編集部03（3
6）5111●印刷所・株式会社三秀舎
バーに表示してあります●乱丁・落丁
さい。送料小社負担にてお取替えい
●6刷・1995年11月15日
ISBN 4-10-602741-0 C0393
1,800円

目次

十一月　奥遠和　5
十二月　御殿場　26
一月　羅臼沖　30
二月　東京　35
二月　奥遠和　41
エピローグ　356

装画　西口司郎
装幀　平野甲賀・新潮社装幀室

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ホワイトアウト

十一月　奥遠和

人から見れば、自殺行為にしか思えないことは分かっていた。自分たちにどれだけ登山の経験があるかは関係ない。この雪なのだ。自然の猛威の前に、人間の多少の経験などは、いとも簡単に吹き飛ばされてしまう。

富樫輝男は、白一色に染まった窓の外へと視線を移した。樹氷のように雪をびっしりとまとった変電施設のコイル越しに、厚い雲に覆われた空がほんのわずかに見えている。周囲の山々の支える天井が、いつの間にか低くなって頂を覆い、その眺めを、舞い飛ぶ雪が包み隠そうとしていた。つい昼前までは、うっすらと雪化粧をほどこした会津駒和岳をバックにして、絵はがきとして残したくなるようなダムの姿が窓の外に広がっていたと思ったら、三時間もしないうちにこの変わりようだ。

発電所では、正午から、メンテナンスを終了したばかりの三号発電機の運転を再開していた。その試運転のために、ダムの地下四十メートルにある発電機室に下りていた電気課の所員との連絡に追われ、外の景色にまで気が回らなかった。

「何だって？　誰がそんなことに許可を出せると思っている」

運転長の石坂昌弘が、理解できないというように首を振った。窓の外の天候と同じように、顔一面に険しい表情を作っている。

「しかし、他に方法はありません」

富樫の隣で、吉岡和志が淡々と言った。静かながらも決意のこもった口調だった。

「この雪なんだぞ。天候が回復するという保証はどこにもない。いや、それどころか、雲行きから見て、悪くなる一方のはずだ。嘘だと思うなら、気象協会にアクセスしてみろ」

「その必要はありませんよ。間違いなく、天候は悪くなる一方でしょう」

「だったら、どうしてそんな馬鹿なことを言い出せる」

「他に方法がないからですよ」

周囲を二千メートル級の山々に囲まれた奥遠和の天候は、あまりにも変わりやすい。ダム湖の上を駆け抜けてくる風

にあおられ、雪は横殴りとなって窓に吹きつけていた。十一月もまだ中旬。本格的な雪の季節には少しばかり早過ぎたが、山々の色づき具合から見て、今年は冬の訪れがいつもより早そうだ、と仲間たちと話していたのが、どうやら当たってしまったようだった。奥遠和はこれからの季節、雪の中に身を沈める。

石坂が大きく手を振り上げ、窓の外を示しながら繰り返して言った。

「俺たちの仕事は何なんだ。何のために、こんな山の中に二十四時間詰めている。遭難者の救助のためか？　違うだろ。九つのダムと発電所を管理するためじゃないのか」

言われるまでもないことだった。富樫も吉岡も、奥遠和に詰めるようになって、そろそろ三年が経とうとしている。仕事に対する誇りや自覚も、人並みには持っているつもりだ。

奥遠和開閉所では、遠和川水系九つの発電所を、集中して管理、運転を行っている。最大出力は、九つの発電所を合わせ、百五十万キロワットを超える。中でも奥遠和ダムは、日本最大量の、六億立方メートルの貯水量を誇る巨大ダムだった。

運転開始直後は、ダムの地下に作られた発電所内で運転制御を行っていたが、上下流のダムが整備されると同時に、集中管理のできる奥遠和開閉所が建設された。そこに、富樫たち電力所の所員が、常時三名ずつ、三交代の二十四時間体制で詰めていた。

配属された当初は、辺りの雪の量に驚かされもしたが、周囲に登り甲斐のある山々が控えていることが、富樫たちには何よりだった。仕事の合間を見つけては、吉岡と二人して競うように登り合っていた。

「では、係長。他にどんな方法があるのか、お教えください。二人の遭難者を救うためには、どうしたらいいのかを」

吉岡が淡々とした口調で言葉を重ねる。石坂の声がまた一段と大きくなった。

「遭難者がいると決まったわけじゃない。ただ、そんなふうな影を、こいつらが見かけただけだ。山から下りた猿かもしれない。鹿や雉かもしれないじゃないか」

視線を振られて、当の発電機の担当者が、責任を一身に浴びたような怯え顔になる。

「この辺りの山に猿がいますか。鹿がいますか。係長は雉が山をうろついてるのを見たことがあるんですか？」

「兎だ。冬眠前の兎なら、そこらにでも、うじゃうじゃいる」

「山の中腹にいる兎が、どうしてダムの上から見えるんです。いい加減、現実を見てくださいよ」

話にならないとばかりに、吉岡が肩をすくめ横を向いた。すねた子供のような仕草で、舌打ちまでする。普段はいかつい体に似合わない人懐こそうな笑顔を浮かべ、人の警戒心をするりと飛び越えて来るような男なのだが、いったんそりが合わないとなると、どこまでも反目し合っても平気な顔でいたりする。特に山に入った場合が顕著で、状況次第では命にもかかわりかねないことだからこそ、たとえ合宿訓練の最中だろうと、気心の知れた者とでなければザイルは結べない、と主張してはばからない男だった。要するに、根が単純にできているのだ、と富樫は理解しているが、相手が上司だろうと、世話になった先輩だろうと遠慮なしでは、そう受け取られないことも多かった。

いつもの吉岡の悪い癖に、富樫はついくすくすと笑い出していた。

「何がおかしい。どうして、こんな時に笑っていられる」

石坂のとばっちりが、富樫にまで向けられた。吉岡が横から強引に話を元に戻そうとする。

「はっきりしてるじゃありませんか。裏の千丈ヶ岳に、二人の遭難者がいるんですよ。まだ分からないんですか、係長は」

一同の見つめる中、石坂と吉岡が睨み合う格好となった。その横で、窓ガラスが風にあおられ、カタカタと小さく震え出す。二人の形相に、間に入ろうとする者はいない。

開閉所四階の、制御室の扉の前だった。

二時三十分を過ぎ、富樫たち第一当番班と交代するために、吉岡たち二班が、麓の長見の町にある電力所から到着した。ちょうど引き継ぎを始めようとしたところに、地下に降りていた発電機の担当者二人が、点検作業から戻って来た。そこで彼らが、ダムに降りる直前、裏の千丈ヶ岳の中腹で登山者らしい影が動くのを見た、と言い出したのだ。

吉岡はそれを聞き、すぐに開閉所の無線を使って地元の山岳会と連絡を取った。開閉所に来る途中で、天候を確かめるために電力所と無線連絡を交わしており、その合間に、地元の山岳会からの緊急無線と思われる交信内容を小耳に挟んでいたからだった。

吉岡の予想は当たった。

明け方近く、片倉山の中腹にある三沢小屋から、千丈ヶ岳に向けて出発した二人組のパーティーがいた。提出された登山計画書では、一時過ぎには小屋へ戻り、下山の予定となっていたが、この時間になっても、まだ戻っていなかったのだ。しかも二人は、ザックの大きさから見て、シュラフやマットなどのビバーク用具すら持っていないようで、今にして思えば初心者に近い者たちであった可能性が高いという。

千丈ヶ岳は、開閉所の背後に連なる新潟側の峰々の、入り口となる山の一つだった。夏ならともかく、天候が急変することの多い今の季節に、初心者が登るような山ではなかった。

さらに、発電機の担当者に言わせると、登山者らしい影が動くのを見かけたのは、山の中腹辺りだった、というのである。事実だとすれば、明らかに尾根をたどる登山道からも外れていた。誰が見ても、遭難はもう間違いのないところまできていた。

担当者が動く影を目撃してから、すでに三時間近くが経過していた。雪は依然として横殴りに降り続き、視界は悪化の一途をたどっている。登山道を外れた初心者が、自力で小屋へ戻れる可能性はどの程度残されているだろうか。彼らの装備も心配だったし、非常食をどれだけ用意していたか、不安もある。

富樫は窓の景色から視線を外し、興奮冷めやらぬ様子の石坂を見た。

「おい、まさかおまえまで、この雪の中を行こうって言うんじゃないだろうな」

先読みして、石坂が声を震わせる。だが、彼らを助けるためには、他に方法はなかった。

麓から救助隊を送ろうにも、今から準備を整えたところで出発は明日の早朝になるだろう。三沢小屋から向かったとしても、稜線をたどり千丈ヶ岳へ入るには、軽く四時間はかかる計算だ。これから夜になり、気温も急激に低下する。雲行きから見て、天候が急に回復することもまずないだろう。そんな最悪の状況の中、山小屋の管理人一人にできることは高が知れていた。凍死した二人の遺体を発見するのが精いっぱいだろう。だが……。

自分たちが動けば違う。

開閉所の裏手の丸山には、事業本部の経営するスキー場が作られている。そこのスノーモービルを利用し、遠和川沿いに下流の旧大白小屋まで回り込めば、二時間ほどで千丈ヶ岳の山頂にたどり着けるはずだった。今出発すれば、少なくとも日の暮れるまでには、彼らがいたとされる山の中腹に到着できるのだ。

「絶対に許可は出せんぞ。誰が自殺行為に手を貸せるものか」

「大げさなこと言わないでくださいよ、係長」

吉岡が小さく笑みを浮かべ、言い返した。

「俺と富樫にしてみれば、この辺りの山は庭みたいなもんなんですよ。目をつぶってたって歩けます」

言いながらも、吉岡の頬は緊張で明らかに強ばっていた。山に油断は禁物。吉岡なら、そんなことぐらいは理解して

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

いる。それでも、遭難者を救うには、自分たちが動く以外に方法はない。だからこその、吉岡の言葉だった。
富樫としても、気持ちは同じだ。たとえ見ず知らずの者たちであろうとも、山で助けを求めている者がいれば、それを知りながら黙って見過ごすことは、どうあってもできそうもない。富樫自身、山の中で見ず知らずの男たちから、何度手を差し伸べられたか分からなかった。冬の剣岳で遭難の一歩手前まで行った時も、そんな山の男たちの助けがなければ、今の自分がここにいたかどうか分からない。
富樫はあらためて石坂に向き直った。
「スノーモービルを借り出せるよう、事業本部に聞いてみます」
「駄目だ。こんな雪の中を山に向かうなんて、正気じゃない！」
「係長、麓への連絡も頼みます。今日の自分の当番については、あとで有休届でも出しますから」
言うと同時に、吉岡はもう駆け出していた。富樫も続き、階段へ向かった。
「誰がそんなもの受け取れるか！」
石坂の怒鳴り声が、頭上から降ってきた。
厳冬期の雪中での作業に備えて、防寒着と登山靴はロッカーの中に用意してあった。ついでに同僚のロッカーを無断で開け、二人の遭難者の分まで防寒着を拝借し、登山用のザックに詰め込んだ。中には、ヘッドランプやザイル、非常食に固形燃料などがあらかじめ入れてある。送電の保守担当者につき合い、山歩きに出る時のために常備していたものだった。
「冷えると思ったら、マイナス六度だとさ」
玄関先の温度計を眺めて、吉岡が面白くもない冗談でも口にするように言い、富樫を振り返った。それから、急に表情を引き締め、頷いた。
「行くぞ」
棚に並べてあったかんじきをつかみ、吉岡がガラス戸を押し開けた。スノーマシンの前に出たかと思うほどに、雪が大量に吹きつけてきた。その中に潜り込むようにして、富樫もあとに続いて雪の戸外へ足を踏み出した。
夕方にはまだ少し時間があるためか、視界は覚悟していたほど悪くなかった。背後の丸山に、スキー場のリフトの支柱が、辛うじて見えている。新たに積もった雪はくるぶしが埋まる程度で、今のところ歩行に支障はない。
防寒着のフードを起こし、裏手にあるスキー場へ走った。十二月初旬のオープンを前にして、事業部の社員たちが、連日麓から通って来ていた。

驚いたことに、開閉所から連絡が行っていたらしい。すでにスノーモービルの準備ができていた。
「ついでに、こいつも持ってけ。おれの取って置きの気つけ薬だ」
顔馴染みの古手の社員が、富樫に向かって何かを放った。受け取ると、ウイスキーのポケット瓶だった。
「ありがたくいただいておきます」
「分かってるだろうが、二重遭難になったら意味がない。引き返すことも忘れるなよ」
吉岡が頷くと同時に、スノーモービルのシートにまたがった。返事の代わりとばかりにエンジンを大きく一つ空吹かしする。
富樫が後ろの荷台に乗り込むと、スノーモービルは新雪を散らし発進した。
雪がつぶてとなって、まともに顔にぶつかってくる。息が詰まり、目を開いているのさえ辛く感じる。
一旦、ダムのスロープ下まで下り、遠和川沿いの作業道を旧大白小屋を目指して進んだ。ところどころ、地面の起伏の激しい場所では、ガリガリと岩のこすれる音が上がったが、車体の傷を心配しているような余裕はない。
雪と風をまともに受け、顔中の痛みに耐えきれなくなってきたところで、旧大白小屋に近い、滝ノ沢の入り口に到着した。
千丈ヶ岳の山頂はガスと雪に隠され、発電機の担当者が見たという中腹すらもう望めなかった。斜面を連なるシラビソやダケカンバの枝が、風に吹かれて悲鳴のような音を立て始めている。氷点下では、風速が五メートル増すごとに、体感温度は約三度下がる。このまま日が沈めば、マイナス二十度には達するに違いない。
稜線に出るまでは、風雪をさけるために樹林帯の中を縫って進んだ。この地方特有の、たっぷりと湿り気を帯びた重い雪が、見る間に肩や顔に降りかかってくる。それを払いながら、一歩ずつ足場を確かめ、直登して行った。
滝ノ沢は雪の吹き溜まりと姿を変え、水の流れを堅く下に閉じこめていた。この沢の北尾根を進めば、千丈ヶ岳の入り口となる足洗沢頭（あしあらいざわがしら）に出る。そこまでたどり着けば、山頂はもう間もなくだった。
富樫の前で、吉岡の広い背中がリズミカルに揺れていた。規則正しく息を継ぐ声が、自分を励ますかのように大きく聞こえる。
会社の山岳部の中でも、体力、技術、状況判断能力と、吉岡は仲間たちから頭一つ抜け出ていた。一緒に行動するたびに、富樫はいやというほどそれを見せつけられた。なまじ歳が同じだけに、周囲の視線も、自然と二人を比べる

ようなところがあった。この辺りの山を張り合うようにして登ったのも、富樫の場合は、はっきりとした競争意識が底にあった。おそらく、吉岡も似たようなものだったろうと思う。

吹きつける雪の向こうに、かすかに千丈ヶ岳の稜線が見えてきた。木々が途切れ、風が次第に強さを増した。夏場なら腰ほどのブッシュが続く辺りだったが、尾を引いて舞い上がる雪以外に見えるものはない。

「なあ、どっちに行ったと思う」

吉岡がその場で足踏みを繰り返しながら、見えもしない周囲の景色を眺め回した。寄り添うようにして立っているというのに、その声が一瞬、風音にかき消されそうになる。

富樫も風に向かって声を張り上げた。

「この雪では山頂へ向かったかどうかは怪しいな」

「同感だ。初心者なら、つい下へ下へと行きたくなる」

「そうなると、丸山側の沢の中か？」

吉岡が風に顔をゆがめ頷いた。

「最悪のコースだよ」

天候が急変する前は、二人の登山者の目に奥遠和ダムの雄大な姿が見えていたはずである。雪に視界を奪われた彼らが、再び山頂を経由して小屋へ向かうルートよりも、すぐ先に見えるダムを目指したことは大いに考えられた。となれば、中腹からそのまま下に向かった可能性は高い。

ところが、そのルートには思わぬ落とし穴が待ち受けている。千丈ヶ岳とダムの間には、丸山とそれに続く片倉山が控えているのだ。どちらも千三百メートルほどの小さな山で、千丈ヶ岳と比較すれば丘陵地帯にも見えかねないが、道なき道を一山越えて進もうというのは、初心者ではほとんど無謀なことに近かった。いつしか沢に入り込み、その沢沿いに、ダムとはかけ離れた方角へ向かいかねない。

しかも、舞い上げられた雪の多くは、窪んだ沢地へと流れて、辺り一帯に吹き溜まりを作る。新雪雪崩でも発生すれば、当然、地滑りを起こした雪は、低くなった沢へ押し寄せる。そんな最悪のケースが、初心者の遭難事故には、多く見受けられるのだ。

「石割沢（いしわりざわ）のほうから見ていくぞ」

吉岡が言って、山頂へ向けて雪尾根を登り始めた。

ここまで来ると、新雪の下は一足先に降った初雪が固まり、アイスバーンとなっていた。キックステップで登山靴の先を凍りついた雪の中に食い込ませ、確実に一歩一歩距離を稼いで行く。

山頂までは登りきらず、途中で石割沢方面へとルートを変えた。雪のために周囲の景色はよく見えなかったが、石割沢への目印となる大岩だけは判別できた。

沢へは入り込まずに、丸山側の斜面の上部をトラバースして行った。この下の沢に、遭難者が入り込んでいる可能性が一番高い。どれだけ声が届くか不安はあったが、二人して力の限り呼びかけた。
「誰かいないか！」
「救助に来たぞ。聞こえたら返事をしてくれ！」
何とも頼りない呼びかけだったが、相手がどこにいるか分からないのでは、とにかく声を張り上げてみるしか方法はない。
富樫は防寒着の袖をまくり上げて腕時計に目をやった。四時二十分。これから山は、釣瓶落としに闇の中に閉ざされていく。いくら歩きなれた山とはいえ、小さな沢の中では、富樫たちも身動きが取れなくなる恐れがあった。残された時間は、あとわずかだ。
腕時計から視線を上げ、沢に向かって再び呼びかけようとした時だった。
「いたぞ！」
吉岡が叫んで、右手を大きく振り上げた。富樫は斜面で足を踏ん張りバランスを保ちながら、その示す先を振り返った。
二十メートルほど前方の、尾根と沢底のほぼ中間辺りだった。風雪のスクリーンの中、それらしき赤い影がうごめいているのが確認できた。
斜面の角度は三十度と少し。慎重に踵を雪の中に蹴り込み、人影の辺りまでターンを繰り返しながら斜降して行った。遭難者を発見したのに喜び勇んで、こちらが沢へ滑落したのでは意味がなくなる。
「大丈夫か。もう一人はどこにいる」
吉岡が呼びかけたが、人影は雪の中でもがき続けるだけだった。赤いヤッケにジーンズ。オーバーズボンさえ用意していない。この季節の山を、明らかになめてかかった装備だった。
歳は三十代の後半か。たっぷりとした口髭を蓄え、ヤッケを着込んだ胸板が厚い。富樫たちよりよほど鍛えられた体格のようにも見えたが、それが油断につながったのかもしれない。フードの中の顔が、寒さと恐怖で凍りついたように表情をなくし、口髭やまつげの先にまで、流れた汗が氷となって張りついていた。
「もう一人はどこだ。二人で来たんじゃなかったのか」
スキー場の係員からもらったウイスキーをザックから取り出しながら、富樫は男の左脇に回り込んだ。吉岡とともに抱き起こしてやり、凍えた口を開かせ、ウイスキーを含ませる。
男の喉が上下し、少し遅れて激しくむせ返った。それで

ようやく、目の焦点が定まってきた。二度三度と力なく頭を振ると、男の青黒く染まった唇から、とぎれとぎれに言葉が漏れた。
「相棒が、この下に……沢に……」
「滑落したのか？」
吉岡が斜面に視線をやり、問いただした。男が震えるようにして小さく何度も頷き返す。だが、声はそれ以上続かなかった。
「行くぞ、富樫」
言うが早いか吉岡は立ち上がり、もう斜面の下に向かっていた。ぐずぐずしていては、ただでさえ頼りない日が暮れていく。富樫は男に防寒着を着せてやると、ウイスキーをもう一口含ませてやった。
「いいか、下の様子を見て戻って来る。ここを動かず待っているんだ。分かったな」
がたがたと全身で震えながら、男は小さく頷き返した。
富樫は男をその場に残すと、吉岡のあとに続いて雪の斜面を下って行った。
風が巻き、時折下からも雪のつぶてが顔にぶつかってくる。千丈ヶ岳を回り込んできた風の通り道になっているらしく、突風が思い出したように押し寄せては、渦となって雪が舞い上がる。降りるにしたがって、斜面の雪も吹き寄せ集められ、膝下の辺りに迫ってきた。足を抜いて進むのももどかしく、膝ごと倒れ込むようにしてラッセルしつつ斜降した。
波のように逆巻く雪の中から、風音とともに吉岡の声が聞こえてきた。
「いたぞ。こっちだ！」
樹氷をつけた枝を震わすカラマツの低木の下だった。眼鏡を凍りつかせた男が、半分雪に埋もれてうずくまっていた。こちらは二十代の後半か。富樫たちよりは、少し若そうだった。顔を覆った雪が眼鏡にまでこびりつき、氷となってレンズの厚さを増していた。これでは、ほとんど前も見えなかっただろう。
「大丈夫か、立てるか」
呼びかけたが、男は何の反応も見せなかった。デイパックを抱えてうずくまったまま、全身をおこりのように震わせている。
富樫はゴアテックスのグローブを取り去り、男の額に手を当てた。寒風吹きすさぶ中だというのに、火のついたメタのように熱かった。この軽装では、体がどうかしないほうが不思議だろう。熱のせいで足を滑らせ、沢へと滑落したに違いない。
富樫がウイスキーを口に含ませてやる間に、吉岡が男の

足元の雪を掘り進めていった。かき出すそばから、風に乗って新たな雪が回り込んでくる。
「怪我はないか。どこか痛むところはあるか？」
どう呼びかけても、男は体を震わせる以外に反応がない。
富樫が男の体を揺すろうとすると、たまりかねたように吉岡が立ち上がった。
「時間の無駄だ。担いで行くぞ」
単純明快、吉岡らしい判断だったが、時間の限られた今は最善の策でもあった。
「富樫はもう一人のほうを頼む。向こうは支えてやれば何とか歩けるだろう」
「分かった。その代わり、十五分ごとに交代だ」
対抗意識からではなく、富樫は言った。吉岡も自分も、重い荷物は山で散々担ぎ慣れていた。平常時なら吉岡一人に任せても問題なかったが、この雪と風では、いくら力自慢の男でも、体力がどこまで続くか不安は残る。
吉岡も自分の心うちは察してくれたようだ。雪にかじかむ頬をゆるめて笑い返した。
「さあ、早いとこ片づけちまおう。開閉所の狭い風呂が俺たちを待ってくれてるはずだ」
凍える男の手からデイパックをむしり取り、ヤッケの上から防寒着を着せた。肩を貸し、抱き起こすと、屈み込んだ吉岡の背に男を負わせた。
かけ声とともに、吉岡が立ち上がる。
沢尾根に出るまでは手助けが必要だろうと思われたが、吉岡は雪の中から足を引き抜くと、一歩ずつ強力(ごうりき)顔負けに斜面を登って行った。
富樫は膝までの雪をラッセルし、ルートを作りながら先行した。湿り気を帯びた雪が粘土のように重く、風にも阻まれ、体が思うように進まない。その間も、刻々と時は過ぎ、周囲の景色が次第に薄闇に染まる。もう一人の髭の男が待つ斜面の途中にたどり着くまでには、交代時間と決めた十五分がたっぷりと必要だった。
髭の男は、左半身にびっしりと雪を張りつけ、富樫たちの帰りを待っていた。吉岡と交代して、眼鏡の男を背負い出発した。
男の震えが背中と首筋から伝わってきた。がちがちと歯の鳴る音が、耳元で聞こえる。震える岩でも背負っているかのように、男の体は重かった。先行する吉岡がラッセルしてくれなければ、とても斜面を登れるものではなかった。
重さに耐えきれずに、途中で一度膝が折れそうになった。髭の男を支えながら前を行く吉岡が、もう少しで振り返りそうになる。
吉岡のことだ。こちらの疲労に気づけば、自分が代わる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.